

いたかりょくち みず わ ガイドマップ

猪高緑地の水の環



8 シダレザクラの里

谷の中央部には、塚ノ杵池から流れ出る水と山からの湧き水が湿地や小さな流れを作っています。小高いところには、大きなシダレザクラがあり、保全活動が行われています。



9 塚ノ杵池

江戸時代に農業用に作られたと言われています。平成23~24年、地震時に水や土砂が流出しないよう、堤防の補修工事を行いました。表面は、なるべくコンクリートで固めず土のまま残すよう工夫しました。



1 森の集会所

区内唯一の屋外プールだった「名東プール」の跡地です。平成24年に、森を守る活動の拠点として生まれ変わりました。

2 切りとおし

長久手と猪高村をつなぐ道として、農作業用に利用されていました。山を削ってできており、両側には地層が見えています。



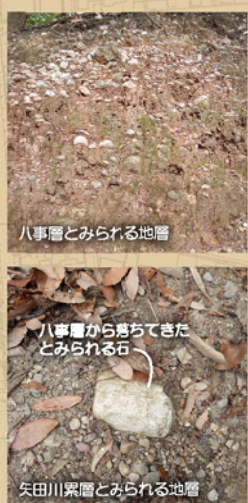
10 地層の断面

ここで見えているのは、矢田川累層です。水を通しやすい砂の層と、水を通しにくい泥の層が見られます。湿り具合や色などを観察してみましょう。



11 親鸞山

猪高緑地の中で最も標高が高く、名古屋市内でも東谷山に次ぐ2番目の高さです。このあたりでは、矢田川累層の上に八事層が帽子のように載っています。全体に赤っぽい色をしています。これは石の間を埋める土が風化して赤くなったものです。また、石は白っぽくなっていますが、こちらも風化によって石の表面の色が抜けた結果です。



7 こもれび池

塚ノ杵池の谷の最下流です。ここもかつては田んぼとして利用されており、さらに下流まで棚田が続いていました。池の名前は、上社学区の子どもたちが作ってくれた、たくさんの案から選ばれたものです。

6 ハンノキ湿地

ここは、以前は西堀池を水源とする田んぼでした。谷の水が集まる湿った土地で、季節や雨の量によっては池のようになることもあります。



5 棚田の広場

かつては井堀上池・下池を水源とする田んぼでした。その後荒地になっていましたが、2001年に棚田が復元されました。地元の市民グループが水の出入り管理や草刈を行い、田植えや刈取りは市民参加で行っています。一般的に、田んぼや農業用水路は、水が地中にしみ込みにくいよう、土手を粘土で塗り固めるなど人の手加えられてきた場所です。



4 井堀上池・下池

かつては、この谷にあったたくさんの棚田をまかなう水源でしたが、今はかなりの部分が陸地になり、ヨシヤスギが入りこんでいます。



3 井堀の大クス

クスノキの大樹です。



マツの生える場所

猪高緑地には、落葉広葉樹、常緑広葉樹、竹が多く、針葉樹としては、一部に植林されたスギ、その他ところどころにマツが生えている場所があります。マツは、養分の少ないところでもたくましく育ちます。ところが、葉っぱや枝や生き物のフンや死がいなどが分解すると栄養たっぷりの土ができ、マツより広葉樹の方が生育に有利になり、マツの幼木は育つことができません。猪高緑地では、かつては樹木が薪などとして持ち出されていたので、あまり栄養が蓄積されない森でした。マツの生えている場所は、その頃の貧栄養の環境の名残かもしれません。

① スズメバチときのこに注意

森にはスズメバチが住んでおり、8月~10月を中心に活動が盛んです。出会ったら、あわてず静かにその場を離れましょう。黒いものに寄ってくるので、夏に森に入る時は白っぽい服装を心がけるとともに、香水などはハチを刺激することがあるので、つけないようにしましょう。また、きのこは毒のあるものが多いので、むやみに触らないようにしましょう。

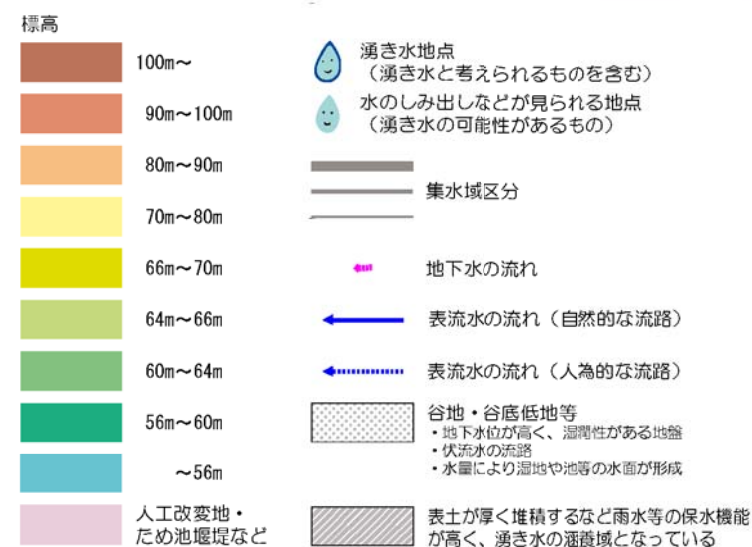
モデルコース

猪高緑地縦断コース

塚ノ杵池~勢子坊の竹林~長湊越し~親鸞山~ミニスポーツ広場~すり鉢池~杖木道~塚ノ杵池
距離:約3km 標高差:約45m 所要:約1時間30分

北側里山コース

塚ノ杵池~井堀分岐~井堀下池~井堀の棚田~ハンノキ湿地~北口公園~シダレザクラの里~塚ノ杵池
距離:約2km 標高差:約35m 所要:約60分



季節の散策テーマ

- 春** 春のチョウや草花を探してみよう
- 夏** 湧き水や水のしみ出しを探してみよう
- 秋** どんぐりきのこを探してみよう (きのこは毒があるものも、むやみに触らない!!)
- 冬** 常緑樹と落葉樹どちらが多いか見てみよう 背の高さもくらべてみよう



猪高緑地の水の環

ガイドマップ



平成29年4月版

なごやの街にも、なごやの森にも雨が降る。
この雨は、どこへ行くんだろう。
里山での、雨と人間、
生き物たちの関わりを、
ちょっとのぞいてみませんか？



現在の猪高緑地にあたるエリア

(名古屋市都市計画写真地図[昭和30年(1955年)作成]を加工して作成)

作成 名古屋市環境局地域環境対策課
協力 名東自然倶楽部 / 名古屋工業大学 増田研究室 / 名城大学 牧野内研究室 / 名古屋市名東土木事務所
(名古屋市都市計画写真地図[平成27年(2015年)作成]を使用)

雨のゆくえ

猪高緑地に降った雨は、森の土にしみこみ、草木を育てたり、地中にしみこんで地下水になったり、地上の水の流れになります。地下水は湧き水となって、湿地をつくり、生き物を育みます。人間は、地上を流れる水をせきとめてため池をつくり、田んぼに導きます。余った水は、暗渠を通じて植田川に流れ、やがて伊勢湾に注ぎます。

トンボからみる水辺の多様性

トンボは、卵～幼虫時代を水中で過ごします。産卵の習性は種ごとに異なり、大小の池、湿地、湧水、流水、そして水草、まわりの草地や林など、必要な環境も異なります。

生息しているトンボの種類は、水辺の多様性と強い関係があるのです。下の絵に、猪高緑地で見られるトンボの例を挙げました。
(協力：高崎保郎)

里山の植生

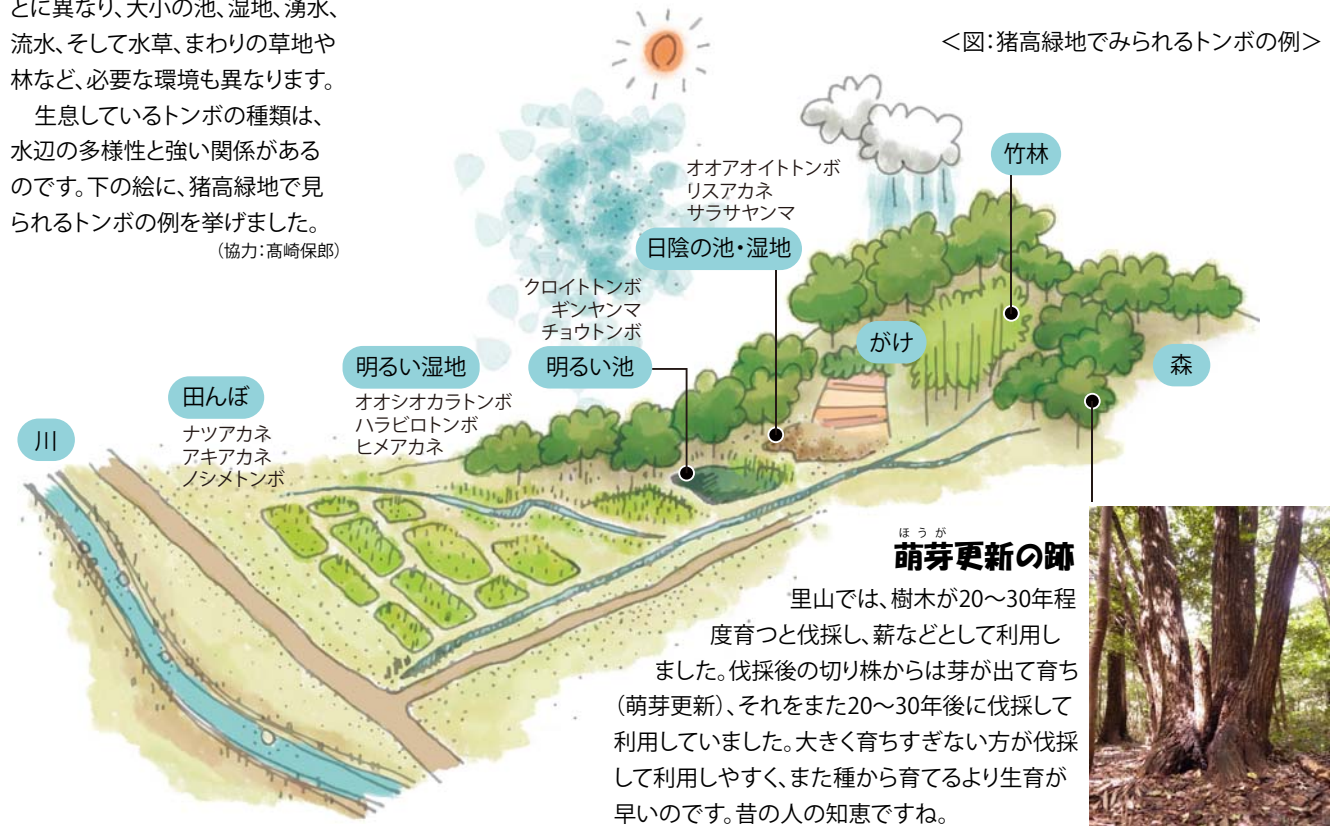
猪高緑地には、コナラ、アベマキなど落葉広葉樹、カクレミノ、アラカシ、シラカシなど常緑広葉樹が混在し、他に少数の針葉樹も生育しています。

この地域の極相林は、常緑広葉樹の森です。これがいったん伐採され、地表に光が届くようになると、たくさんの光を必要とする陽樹(落葉広葉樹に多い)が成長できるようになります。しかし、いったん陽樹が大きく成長すると、森の中は暗くなり、陽樹の若木は生長できなくなります。一方、陰樹(常緑広葉樹に多い)は暗い中でもゆっくりと成長できるので、森はいずれ、もとの常緑広葉樹の森に戻っていきます。常緑広葉樹の森は、地中の水をたくさん利用して蒸発散させるので、水が流出することが少なくなります。現在の猪高緑地は落葉広葉樹の森から常緑広葉樹の森へと変化する途中にあると考えられます。

猪高緑地の樹木は、昭和30年頃まで、薪などとして伐採・利用され、低密度に落葉広葉樹が生える明るい森が保たれていました。いわゆる里山です。里山では、未利用水がところどころに湧水湿地や小さな池をつくり、両生類やトンボをはじめとする生物多様性豊かな場所が形成されます。



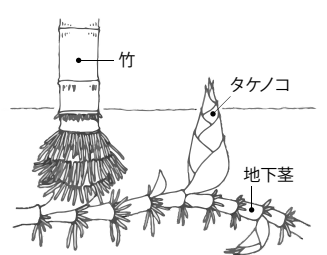
<図：猪高緑地でみられるトンボの例>



竹について

竹は、昭和30年頃までは農作業や生活道具の材料として盛んに使われていました。しかし、プラスチック製品の普及や安価な外国産タケノコが多く出回るようになり、手入れが行き届かなくなった竹藪の拡大は全国的な問題になっています。猪高緑地も、このままでは、いずれ全体が竹藪になる可能性があります。

竹は、互いに地下茎でつながっており、これが伸びていくことで竹林を拡大していきます。地下茎でつながった別の竹から栄養をもらえるので、暗い森の中へも進出することができます。竹が多い場所では、日照不足により、他の幼木は生長できません。



猪高緑地の地質

猪高緑地を歩くと、石、砂、泥などいろいろな地質を見ることができます。これらは主に、東海層群の矢田川累層という地層です。今から500万～300万年前、この地域は内陸の浅い湖(東海湖)でした。湖は水の流れが遅く、底には粒子の細かい泥が堆積します。しかしこの湖はとても浅いので、雨の少ない時期には干上がり、水は複雑に地表を流れました。流れる水の底には砂や石が堆積します。こうして泥層と砂や石の層が複雑に重なりあってできたのが矢田川累層です。これが後に隆起し、丘陵となって猪高緑地の地表付近に露出しています。矢田川累層の一部には、約360万年前の火山の噴火による火山灰を含むとみられる層もあります。

矢田川累層は、栄養分の少ない地層からなり、樹木の生育に適さず腐葉土があまり形成されなかったこと、湧き水によって腐葉土が洗い流されたことから、やせた土地を好む植物の貴重な生息域となっています。

一方、猪高緑地の標高が高いエリアの一部では、矢田川累層の上に八事層もあります。これは、東海湖の時代よりずいぶん後、河川によって運ばれた砂や石が堆積したもので、大きくて丸みのある石を含むことが特徴です。

